プレハーノフの飢饉論（一八九一—九二年）㈡

小島　定

一　はじめに
二　プレハーノフの「ロシア資本主義発展論」——『われわれの意見の相違』（一八八五年）
　1.　「人民の意志」派の革命論批判
　2.　共同体解体論の構成
　　㈠　共同体一般の解体の論理
　　㈡　ロシア農村共同体の解体について
　　㈢　「外的解体論」と「内的解体論」
三　飢饉論とロシア資本主義の構造把握　（以上前号）
　1.　一八八〇年代のプレハーノフ
　2.　大飢饉の原因をめぐって
　3.　飢饉克服の方向
四　「外発的資本主義発展像」と「東洋的専制論」

三　飢饉論とロシア資本主義の構造把握

1.　一八八〇年代のプレハーノフ

さて、前章で述べたように、ロシア社会認識における視角転換、とくに農村共同体の解体の論理の把握とその実証を軸とする「ロシア資本主義発展論」の提起をもって、プレハーノフは、マルクス主義への転換をとげた。旧「土地総割替」派の中心メンバーとともに結成した「労働解放」団に拠って、新たな労働者社会主義党の組織化、並びに「全ロシア的事業」として果されるべき民主主義革命（＝ツァーリ専制の打倒）のために、亡命地のジュネーブやパリからロシアへのマルクス主義思想の宣伝活動と理論的活動をくりひろげた。しかし、八〇年代をつうじて、彼らの活動は必ずしも順調に運んだとはいえず、誕生したばかりのロシア・マルクス主義を待っていたのは、むしろ苦難の時代であった。

周知のように、一八八〇年代のロシアは、政治的には「人民の意志」派によるツァーリ暗殺（一八八一年三月一日）以後、一時の革命的熱狂の波もひき、新帝アレクサンドル三世治下にあって反動体制が全ロシア社会にわたって強化された時期である。一切の政治的革命的な活動が窒息せしめられ、多くのナロードニキ的心情をもつ若者たちの間には政治的無力感が支配した、いわばロシアの革命運動にとっては「冬の時代」であった。一八八八年には、プレハーノフが主たる論敵とした「人民の意志」派の理論家の一人、チホミーロフが君主主義者に転向するという一つの象徴的事件も起きている。[1] また、それでもなおナロードへの共感と奉仕の念を失わなかった知識青年たちは、反動的

な政治的現実の奥底に沈澱している農民の志向に一縷の望みを托しつつ、ある者は地方ゼムストヴォの医師や農業技師となって、またある者は人民生活の現状を明らかにする統計調査の事業に加わったりして、いずれにせよ、農民の日常生活に密着した分野で地道な活動をしたのである。いわゆる「小さな行ない」と呼ばれた運動がそれであった。[2] 九〇年代末から二〇世紀冒頭にかけて再び（しかし今度は本格的な）危機がロシアに訪れたとき、彼らはいわゆる「第三の要素」と呼ばれる階層の指導者となり、一九〇五年革命の大衆的人民運動の爆発の準備に少なからぬ役割を担うことになるであろう。[3] だが一八八〇年代から九〇年代のツァーリの反動的支配とインテリゲンツィアの政治的アパシーの状態がつづく中、エミグレ革命家集団たるプレハーノフたちがロシア国内に拠点を築こうとした試みは、ことごとくつぶされ、誕生してから十年というものロシア・マルクス主義は、労働者大衆との結びつきはおろか、インテリゲンツィアの多数をもとらえるには至らなかった。プレハーノフの主張は、したがって、いわば荒野の叫びのようなものだったのである。

のみならず「労働解放」団の側でも、同志イグナートフ（В. Н. Игнатов）の死、ヂェイチ（Л. Г. Дейч）の逮捕などによって、資金難と組織活動の停滞に陥り、またプレハーノフ自身の身辺にも不幸と災難が相次いで襲った。生活苦から生じた三女の死、度重なるオーバーワークによるプレハーノフの病状進行。持病の結核が悪化し、とくに八五年から八八年にかけて、プレハーノフは死の淵をさまよったとさえ伝えられている。[4] このような公私にわたる苦難の中にあって、プレハーノフはときとして絶望的な言葉さえもらすことがあったという。[5]

このように八〇年代—九〇年代初めにかけてのロシアは、政治的には反動体制と革命運動の沈黙とによって特徴づけられ、プレハーノフにとっても「孤立の十年」（S・バロン）であったけれども、経済史的にみるならば、この期

間はまたロシア資本主義の発展過程における一つの転期であった、ということができる。〔補註〕一八九一年から九二年にかけて、全ヨーロッパ・ロシア部分を襲った大飢饉の発生は、この「転期」の意味を象徴的に示す事件であった。そして、それはロシアのインテリゲンツィアの間に、再びあのロシアの「呪われた問題」＝農民問題をよびさまし、この問題への取組みから発する流れが、やがて九〇年代後半になって活発化するロシア資本主義論争へとつながっていくことになる。[6] ここに至って、プレハーノフの主張は、ロシアの革命的インテリゲンツィアの第二世代の間に（この典型的代表者の一人がレーニンであったことはいうまでもない、）同調者を得て、プレハーノフは「孤立」から「脱却」（S・バロン）するのである。

（1） この事件はナロードニキ青年たちに大きな衝撃を与えたといわれている。プレハーノフも、チホミーロフの「転向」表明と同時にただちに筆をとり、この「転向」は、かのナロードニキ的ロシア社会論＝「ロシア独自性論」のもたらした一つの論理的帰結だ、と論じ、改めて「ロシア独自性論」に批判を加えた。このチホミーロフ批判論文の中で、プレハーノフの独特なロシア史把握が、すなわち社会の「表層における西欧化」が、かえって基底の「アジア化」を伴ったとする――後に彼のロシア社会論＝「東洋的専制論」の基軸の一つになる――理解が、その一端を現わしはじめる。この点については以下本文の中で論及されるであろう。なお、プレハーノフのチホミーロフ転向批判にかんする論稿としては以下の三編がある。Г. В. Плеханов, Неизбежный поворот («Социалдемократ» кн. I); он же, Лев Тихомиров, «Почему я престал быть революционером». («Социалдемократ» кн. I.); он же, Новый защитник самодержавия, или горе г. Л. Тихомирова (Изд. «Русск. Соц.-Дем. Союза», Женева, 1889г.) いずれも Г. В. Плеханов, Соч. III に収録されている。

（2） J. H. Billington, Mikhailovsky and Russian Populism, 1958. pp. 146-152. A. P. Mendel, Dilemmas of Progress

in Tsarist Russia. 1961. pp. 90-92.

(3) 「第三の要素」についてはレーニンの『全集』第五巻、二八六頁以下も参照。なお、九〇年代のナロードニキ主義の特徴は、六〇—七〇年代の革命的ナロードニキが対抗してきたロシア自由主義の潮流と癒着した点にある。レーニンがこの点を鋭く指摘していた点はよく知られている所であろう。例えば『レーニン全集』第一巻、三八九頁など。

(4) S. H. Baron, Plekhanov, the Father of Rssian Marxism, 1963, ch. 8 A decade of isolation, pp. 117-138.

(5) Переписка Г. В. Плеханова и П. Б. Аксельрода, т. I, стр. 94.

(6) 「ロシア資本主義論争」をめぐる状況については、田中真晴『ロシア経済思想史の研究』が詳しい。一七五頁以下を参照。

〔補註〕

一九世紀半ばにロシアは西欧資本主義の外圧（＝クリミア敗戦）を契機とし、農奴制的土地所有の再編＝雇役制的土地所有を基底に据えて、資本主義世界に組み込まれていった。六〇年代後半から七〇年代半ばの第一次鉄道ブームを原蓄典型期として、八〇年代後半には——政治的にはアレクサンドル三世治下の反動体制下で——産業資本確立過程に入っていったものと思われる。第二部門、とくに衣料生産部門においては、八〇年代半ばに綿織物輸出が輸入を凌駕し、一応国内市場の征覇が達成される。[1] そしてこれを基礎にして、第一部門とりわけ石炭、鉄などの基本原料部門の確立過程が始まらんとする（なお基本技術＝機械をつくる機械工業の確立は、その自給率の低位が物語るように必ずしも判然としない点が残るが）。[2] しかし、第一部門の確立は——それはロシア資本主義確立の最終局面でもある——一つの困難に直面する。というのは、この時期は（八〇年代半ばから九〇年代半ばにかけての時期）、資本主義世界全体にとっての長期にわたる構造的不況、いわゆる大不況の深化の時期と重なっており、こうした事情が、それ自体脆弱な基盤に立つロシアの産業資本の確立過程に対して、特異な一条件として作用したからである。西欧資本主義と地理的にも隣接しているロシアの特殊な条件は、「飢餓輸出」の体系にみられるように、西欧穀物市場に直接的かつ大衆的に依存しているロシア農業の市場構造の特質とともに——この点、旧日本資本主義との差異を示す——、産業資本の

確立過程に対しても大不況の直接的影響を他のどこよりも強く与えるであろう。ここに、ロシア資本主義の最終的確立を著しく難渋なものにした原因の一つがある。のみならず、大不況はまた、いうまでもなく、資本主義の独占段階＝帝国主義段階への移行の過渡期でもある。第一部門プロパーにおける生産の飛躍的拡大が西欧列強の軍備拡張と帝国主義的権力政策（マハト・ポリティーク）を本格化させ、それが又、ロシア資本主義の確立過程に対して、新たな促迫（第二の促迫）要因ともなり、西欧列強の帝国主義政策に対抗しうる軍事力強化を、したがって、また、基柢における生産力基盤（基本的には未だ三圃制農業）に比して更に一段と著しく不均衡な第一部門プロパーの飛躍的発展＝「重工業化」を、ロシアに強要することになった。かかる重工業化促進の課題は、いうまでもなく従前に比べて一段と膨大な資本投下を必要とするであろうが、これがツァーリ専制政府＝国家財政の主導の下で推進されなければならないとすれば、ただでさえ――低位の農業生産力に規定されて――逼迫した国家財政を更に一段と圧迫することになるのは当然であろう。八〇年代を通じて、ロシアの蔵相ヴィシュネグラツキーを悩ましたのは、国際収支の悪化と国庫の逼迫であったことはよく知られている。[3] そのことはとりもなおさず、農民収奪の一層の強化に導かざるをえない。こうして八〇年代末の農民収奪の結果は、一八九一―九二年の大飢饉の発生となって現われたのである。

だが、この危機的状況は、ヴィシュネグラツキーに替わって蔵相に就任したヴィッテの下でひとまず回避された。膨大な外国資本の導入、そのための通貨改革＝金本位制の確立、そして再び鉄道建設、しかし、今度はきわめて大規模なシベリア鉄道建設、これを呼び水とした新興南部製鉄、石炭業の飛躍的発展――いわゆる「ヴィッテの工業化」。九〇年代のロシアの工業化は、理論的にみれば第一部門＝生産手段生産部門プロパーの内部循環＝再生産によって特徴づけられる（トゥガン＝バラノフスキーの再生産表式の意義）。そしてここに、合法的マルクス主義が登場する基盤が与えられる（政治的には、彼らはやがてカデットに結集する。トゥガン表式＝カデット的資本主義の理論的基礎！）。

しかし、ヴィッテの工業化も、一時的にのみ危機を回避したにとどまる。なお基柢としての雇役制的土地所有が存続するかぎり、工業化の負担は、結局は農民大衆の肩に転嫁される他ないからである。ロシア資本主義の危機は、シベリア鉄道の建設完了

とともに、再び農業＝農民問題として現われる。しかし今度は本格的危機として（一九〇五年革命）。

（1）中山弘正「ロシア資本主義成立期の諸問題——工業をめぐって」『経済志林』第三一巻四号、二〇一頁。

（2）ロシア機械工業の著しい低位については伊藤昌太「ロシア機械工業の発展の歴史的特質」『歴史』第三八輯を参照。

（3）ヴィシュネグラツキーは、一八九一年の大飢饉とそれによる国家財政破綻の責任をとって退陣するが、その時「人民の支払能力はもはや枯渇した」という有名な言葉を残した。T. H. von Laue, Sergei Witte and the Industrialization of Russia, p. 27. 菅原崇光訳『セルゲイ・ウィッテとロシアの工業化』二五頁。

2. 大飢饉の原因をめぐって

さて、一八九一年—九二年の大飢饉について、プレハーノフは『われわれの意見の相違』（一八八五年）において確立したマルクス主義の見地に立って、これを基本的にはロシア資本主義の原始的蓄積過程がもたらした、著しい農民収奪の結果として把える。それと同時に、この飢饉が農民経営の破綻をもたらしただけでなく、ロシアの農業生産それ自体に与えた深甚な影響によって、今やロシア農業そのものの解体の危機が迫っているとの視点を提示する。そして更に、かかる農業解体の危機への認識が、ロシア資本主義の著しく狭隘な農業基盤と農民経営の特殊な後進性にプレハーノフの眼をあらためて開かせる契機となり、——『相違』段階とはまた異なった——新たな角度から（ツァーリズム＝「東洋的専制」とする視角から）ロシアの共同体にアプローチすることになるのである。

プレハーノフは、まずこの飢饉の考察を始めるにあたって、ロシアの主要穀作地帯を襲った凶作と飢饉が、単に農業のみならず——いまや資本主義の発展軌道に深く入り込んだ、と一八八九年にプレハーノフが判断したところの——

工業をも巻き込む「全ロシア的災厄」であり、この農業危機の根本的な克服が果されないかぎり「全ロシアの破産」にさえ転化しかねない、文字通りロシア国民経済全体の危機である、との見方を示した。プレハーノフの言う所によれば、ロシアの工業は、大工業も小工業（＝クスターリ工業）も「従来は主として国内市場によって支えられてきた」のであるが、飢饉による農民的購買力の激減は、ロシア工業からその製品の販路を奪ってしまった。今クスターリ工業は全般的壊滅の危機に陥り、大工場でも操業短縮、工場閉鎖が相次ぎ、その結果ロシアの労働者大衆は、穀物価格が騰貴して仕事が一番欲しいその時に、失業を余儀なくされている。[1] だがこれも単に一過性の現象にとどまらないものがある。というのは、この飢饉の深刻さは、たとえばゼムストヴォや一部は政府をも動かし、農民への種子の貸付などの救援措置をとらせてはいるが、[2] しかし、この貸付られた種子も実際には農民によって播かれてはいない（農民はそれをみんな食べてしまう！）。したがって、翌年もまた飢饉が予想されるからである。これはロシア経済の「破産」を示す以外の何ものであろうか。プレハーノフは問題の深刻さをまずこのように訴えるのである。[3]

ところでロシアにおける凶作は今に始ったことではない。それ以前にも、また自然的条件の比較的良好な所でも頻発してきた。プレハーノフが指摘するには、例えばヴォルガ中下流域でも、一八八〇年から九一年までの十一年間に、作柄良好の年はわずか四回を数えるにすぎず、凶作の年は実に七回にものぼる。ロシア農業は、凶作がいわば「通常の現象」[4]といわれるほどの状態にある。このような状態の下では、農民は自己の食糧さえ満足に確保しえないのだから、農民の――したがって当時のロシア農業の――基幹的生産手段たる役畜が不断に減少していくのも当然の事であった。役畜の減少はとりもなおさず、――当時の農業生産力水準の下では――分与地での施肥の停止を意味する。その結果は収穫の減少であり、農業収入の減少である。農民の農業からの収入減はまた、農民の間で土地放棄の傾向を

生むであろう。その結果は「もはや豊作がのぞめないほどの土壌の消耗」[5]という事実である。一八九一年には「ついに避けがたいカタストローフが生じた」。それは「農民経営に対して最後の打撃を与える」[6]ものである。プレハーノフは、ロシア農民経営の陥っている「悪循環」についてこのように述べ、これによってロシア農業の「衰退」＝農業解体の危機の迫っていることを指摘するのである。

飢饉が示すロシア農業解体の危機、それが「全ロシアの破産」をも導きかねないとすれば、この飢饉の根本原因が究明され、したがってそれをまた根本から克服する方策がとられないかぎり、現在とそして又将来のロシアを救うことはできないであろう。プレハーノフは、この飢饉の根本原因を解明すべく、再び——八〇年代の政治的反動期には沈黙させられていたが、この飢饉発生とともに再び——発言を始めた「社会」（общество）[7]に向って呼びかけるのであった。「社会」とはこの場合ロシアの自由主義的潮流のことであったが、彼らはその機関誌等で農村の窮状について報告し、一方では自ら義捐金の募集等を呼びかけながら、他方ではゼムストヴォや政府に対して早急に農民経営の救済措置をとるよう要請した。それに促迫され、ゼムストヴォは農民への食糧援助、種子貸付、小信用供与など若干の措置を講じてはいるが、それはしかし結局の所、大海の一滴にしかすぎない。ゼムストヴォはまた政府に対して財政援助を要請しているがそれは実現しない。というのは政府自身が今や財政逼迫の状態にあるからである。

だが実は、政府の財政逼迫という事実こそむしろ、プレハーノフによれば今回の大飢饉の真の所在とそれの克服の基本方向を示唆するものなのである。[8] ツァーリ専制政府は、なによりも農民からの租税収奪に依拠しているからである。

したがって、問題はツァーリ専制政府による農民収奪体制、それを確立した一八六一年の「農奴解放」に帰着する

であろう。プレハーノフは飢饉の原因追求の中で、まずロシアの「農奴解放」とその特質を問題にするのである。

飢饉論において示されたプレハーノフの「農奴解放」観は、次の言葉に要約される。

「一八六一年二月十九日は地主権力を終わらせたが、農民をただ単に名目的に自由にしただけだった。実際には、それは旧地主地農民の農奴制的隷属の重心を他の所に移したにすぎない。すなわち農民は『御主人』（барин）や『旦那』（пан）の農奴から、国庫の農奴になったのである。農民の生活を保障するという見栄えの良いスローガンのもとで『解放された』農民に分与地が押しつけられ、その代償として分与地の価格をはるかに超える買戻金が徴収されることになった。農民はその買戻金を完済しなければ、自己の土地さえ放棄することもできなかった。」(9)

みられるように、プレハーノフの「農奴解放」論は、第一に、「農奴解放」によって「地主権力」に終止符がうたれたという理解にたっていることである。「貴族は土地所有者階級としては重要性を失った」(10)というように、プレハーノフの改革後のロシア地主制に対する過小評価はしばしば指摘される所である。しかし、改革後の農民の土地緊縛体制はプレハーノフにおいても明確に認識されていたのであって、ただ、ここで留意されるべきことがらは、プレハーノフが改革後にも維持存続した「土地緊縛体制」について、その形態変化という点、すなわち、右にみられるように、農民の「『旦那』に対する農奴から『国庫』に対する農奴」への転化という点に力点をおいて把えている、ということである。また、他の所でも「『解放』の問題は、農奴住民によって創出された剰余生産物」（ないし剰余価値）に対する獅子の分前が誰のものになるか、国家かそれとも地主かといういまひとつの問題に帰着する」(11)（傍点――プレハーノフ）と、述べているように、プハーノフにおいては、農奴解放をめぐる対抗は、国家対地主の関係におかれて

いるのであって、地主対農民が基軸とはされていない。これはいうまでもなく、農民の土地買取代金を国家が一時立て替え、以後農民は国家に買戻金を払うというロシアの農奴解放の形式、いわゆる「買戻操作」のメカニズムがプレハーノフの念頭にあったことを意味するが、「解放」によってロシア農民は個別地主の農奴から「『国庫』の農奴」になったという把握は、改革後地主制への過小評価と相まって、プレハーノフの「農奴解放」観の第二の、そして重要な特徴として指摘しておかねばならない。この点は、彼の新たなツァーリズム論＝「東洋的専制論」の形成という論点にかかわって後に再びみることがあろう。

いずれにせよ、分与地の平均価格の一・六倍から三倍にも達する買戻金賦課、[12] 更に各種の公租（ゼムストヴォ税や共同体諸経費の負担）の賦課等の結果、改革後のロシア農民に課せられた公租の総額は、彼らの「支払能力」を大きく上回わるものであった。したがって、プレハーノフは「ロシア農民の経済状態は『解放』以来、きわめて悪い方に変化した」[13]〔傍点——プレハーノフ〕というのである。一八九一年—九二年の大飢饉の発生は、いまやツァーリ政府の農民収奪がその限界点に達したことを示すものに他ならない。

「ぴんぴんに張り切った弦はついに切れてしまった。収奪を更に一層強化された農民は、ついに監獄の脅しによっても、笞刑によっても一カペイクも徴収できないような状態に陥った。『人民の担税能力の伸縮性には限界がある』——かつてグレイクは仰々しくそのようにのべた。いまヨーロッパ・ロシアの多くの地方はすでにそうした限界に達したのである。[14]」

「農奴解放」によってかえって強化された農民収奪、「買戻操作」をつうじた農民大衆の「『国庫』への農奴化」、これがさしあたりプレハーノフによれば一八九一—九二年におこった大飢饉の直接の原因なのであった。そして、い

まこの飢饉が明らかにしたことは、「人民の支払い能力の枯渇」（ヴィシュネグラツキー）という事実に他ならない。したがって、それはまた農民からの苛酷な収奪によってのみ生きながらえてきたツァーリズムの危機を示すものにほかならない。

だが何故ツァーリズムは、――プレハーノフの当時の見方に従っていえば――自分の首を締めるほどまでに、人民収奪を強行しなければならなかったのであろうか。プレハーノフはここからロシア資本主義の特質の問題に迫ろうとする。

プレハーノフによれば、もともとツァーリズムは農民収奪に支えられ、また飢饉も改革前にしばしばみられた現象であるが、今日の大飢饉は過去のそれとは全く異質な歴史的局面において生じた現象である。過去の飢饉が現物経済の条件の下に起ったとすれば、今日のそれは何よりも貨幣経済の地盤の上に起った現象である。その点に今回の農民経済の破局の凄じさがある。かかる事態を歴史的に位置づけるとすれば、まず第一に、今日のロシア農民の状態は、フランス資本主義の原蓄過程、ルイ十四世治下のフランス農民の状態と比較することができるだろう、とプレハーノフはいう。しかし、その際ロシアの原蓄の起点＝「農奴解放」を促迫した要因が「クリミア・ポグロム」（＝クリミア敗戦）にあり、これがツァーリズムをして大工業の一挙的創出を必須の課題たらしめたという理解を示している。[15] そしてまた、大工業育成のために必要な資金が国家による農民収奪（＝買戻操作）によって基本的に賄われること、この点もまたプレハーノフは強調している。[16] したがってプレハーノフにおいては、クリミア敗戦を主たる契機としたロシア資本主義の原始的蓄積過程の進発が把握されており、すでに機械制生産力段階に到達していた西欧資本主義のインパクトによって、現物経済基調のロシア農民経済が一挙に貨幣経済＝資本主義の大波にのみ込まれた過程として、

改革後ロシアの原蓄過程の苛烈さが把握されているといってよい。それ故に、ロシア農民経済の破局は、——マニュファクチュアの生産力段階にあったところの——アンシャン・レジーム下のフランス農民とは比較にならないほど激しく進行せざるをえなかったという、ロシア資本主義進発における世界史的な規定性の問題がプレハーノフの視野におさめられている。[17] それと同時に、西欧に一歩遅れて進発したロシア資本主義は一般に政府による手厚い保護育成措置を受けたが、とくに八〇年代以降、世界資本主義の大不況の深化とともに高率保護関税体制が強化されることによって、ロシアの産業資本は稀にみる法外な高利潤を保証されたという事情、すなわちロシアの産業資本の投機的、寄生的性格にもプレハーノフは留意を促している。飢饉によって示されたロシア農業解体の危機は、今ひとつには、かかるロシアの商工業資本の「異常な高利潤」の結果でもある、とプレハーノフには理解されていた。[18] 政府によって保証された商工業の高利潤が農業への投資を阻み、農業から資本を引き上げてしまう。したがって、直接には「租税の重圧」を免れていた、——そして、それ故に農民分与地とは別に「合理的農業」への発展可能性をもつとも考えられるところの——「私的所有の土地」における経営も、[19] 農民分与地の場合と同じように、基本的には略奪式農耕が行われているのであり、同じく結果は土地の消耗である。

さて、プレハーノフによってロシア農業解体の危機と把握された一八九一—九二年の凶作と飢饉が、右のように把えられたとすれば、国家による直接的収奪によるにせよ（農民経営の場合）、また農業から資本流出を促す商工業の「異常な高利潤」であるにせよ（私的土地所有の場合）、この危機の根源が国家財政＝ツァーリズムに帰着せしめられるのはいうまでもなかろう。商工業の高利潤も、結局ツァーリズムによる農民収奪の体制によって可能となったに他ならないからである。

だがしかし、そもそも、国家＝ツァーリズムによるかくも激しい農民収奪がどうして可能になったのであろうか。たとえロシア農民の状態がルイ十四世治下のフランス農民のそれと歴史的に比定されるべきものであるにせよ、ロシア農民が蒙った悲惨な状況とロシア農業解体の危機は、絶対王政末期のフランスの状態とはまた大きく趣きを異にしているようにみえる。この違いは――資本主義の進発期における国際環境＝世界史的段階の差異に加えて――ロシア内部の伝統的社会関係にも起因するのではなかろうか。プレハーノフの思考の中ではそのような推論が行われたのであろう。この点に即してみるとき、ロシア農民の状態は、――フランス農民の状態よりもむしろ――古代エジプト農民の状態を思わせるものがある。ロシア絶対主義＝ツァーリズムの権力の超絶性、地主権力との農奴解放をめぐる対抗、農民の「国庫」への農奴化などの特徴は、むしろ古代エジプトの「東洋的専制国家」に類似したものではなかろうか。プレハーノフは言う。「すべての問題は農民の国家への隷属にある。」[20] ロシア農民と古代エジプト農民との「相違はただ重要な意味のない部分的なものにすぎない」。基本関係、すなわち農民の土地関係という点では本質的には全く同一だ、とプレハーノフはいう。

「エジプト農民は土地に緊縛されていた。ロシア農民も土地に緊縛されている。エジプト農民の『土地保障』の体制は、なによりもエジプトの専制主義の堅固さを保障した。ロシア農民の『土地保障』体制は、ロシア・ツァーリズムの堅固さを保障する（しかしただ暫くの間保障するにすぎないが）。その点で古代エジプトは我が国と全く同じであった。[21]」

この「土地保障」の体制、すなわち「農民の国家への隷属」を支える土地制度とは、プレハーノフによれば「土地割替を伴う現代ロシアの共同体」のことに他ならない。[22] 農民への強制的土地分与（＝買戻）、共同体内の分与地の定期

割替によって農民の担税能力を確保し、同時に租税支払いの連帯責任制と旅券制度とによって農民の土地緊縛を完成させた割替共同体——これがロシア農民から苛酷な租税収奪をツァリズムに保障した土地関係の根幹である。ここに割替共同体を「固有な経済的基礎」とするツァーリズム＝「東洋的専制」というプレハーノフに独自な理解が示される。この論点がプレハーノフのロシア社会認識の枠組の中に特別な意味をもって現われたことが、彼の飢饉論の大きな特徴のひとつであった。そしてまた、このようなツァーリズム理解は、ツァーリ専制国家を、——その本質において地主制の権力などとみるのではなく、——地主権力とは区別される、それ自体独自の経済基盤をもつ自立した権力として把握する視点に立つことでもある。農奴解放をめぐる地主利害と国庫利害との対立を、あたかも解放をめぐる主要な対抗軸であるかのように描くプレハーノフの「農奴解放」論はまた、ここにその主たる論拠があったのである。

だが、まさにこの点に近代ツァーリズムの「矛盾」が存在する——プレハーノフの飢饉論の基調はここにある。ツァーリズムは割替共同体を自己の存立の基礎とするけれども、にもかかわらず一八六一年以降は、自らその基礎の解体をもたらすような方策をとらざるをえなくなった。それを促したのはクリミア敗戦であり、ロシアにおける大工業発展の必要性である。大工業はそれ自身、「二重の意味で自由な労働力」を必要とする。それは共同体の解体によってしか創出しえない。かくしてプレハーノフはいう。「政府は割替共同体を廃止しようとはしないが、しかし同時に、〔結果的に〕その解体をもたらすような一連の法律を発布している。このような二面性が国庫と企業家をともに『満足させる』ものとして期待されている」[23]と。だが今やツァーリズムの「矛盾」は誰の眼にも明らかとなった。「人民の支払い能力は枯渇し」、ロシア農業の生産力の壊滅的事態が招来された。したがって、プレハーノフは、今や「ロシアは自己の運命を、破産したツァーリズムの手からもぎとるか、それとも完全な経済的消耗によって破滅するか、

そのどちらかだ」[24]、と、飢饉問題の解決の方向を提示するのである。

(1) Г. В. Плеханов, Всероссийское разорение ,(Под редакцей Д. Рязанова, Г. В. Плехаов. Сочинения, том III., М.-Л., 1923. стр. 314.)

(2) ゼム ストヴォ、政府の飢饉救済策については、R. G. Robbins Jr., Famine in Russia 1891-1892, the Imperial government responds to a crisis. Columbia U. P. 1975. が詳しい。

(3) Г. В. Плеханов, Соч., III, стр. 315.

(4) Там же, стр. 340, 363.

(5) Там же, стр. 363. стр. 363.

(6) Там же, стр. 341.

(7) S. H. Baron, Plekhanov; the father of Russian marxism. Stanford, 1963, p. 140. A. P. Mendel, Dilemmas of Progress in Tsarist Russia, Legal marxism and legal populism. Harverd U. P. 1961, p. 119.

(8) Г. В. Плеханов. Соч. III, стр. 341-342.

(9) Там же, стр. 360.

(10) Там же, стр. 365.

(11) G. V. Plechanow, N. G. Tschernys chews ky. 1894, S. 11.

(12) 菊地昌典『ロシア農奴解放の研究』四二五—四二六頁。

(13) Г. В. Плеханов, Соч. III, стр. 362.

(14) Там же, стр. 362.

(15) Там же, стр. 348.

(16) Там же, стр. 348-349.

(17) プレハーノフは、エンゲルスが『クリティカ・ソシアーレ』一八九二年四月一日号に書いた「ロシアにおける飢饉」から次の箇所を引用している（Там же, стр. 370）。

『現物経済から貨幣経済への移行という、産業資本のための国内市場形成の主要手段が、農民のあいだにひき起す荒廃は、ボアギュベールとヴォバンによって、ルイ十四世治下のフランスの実例について古典的に叙述されている。だが当時起っていることとくらべれば、児戯に属する。第一に、その規模は三、四倍も大きく、第二に、生産諸条件の変革は——それに役立てるためのこの移行が農民に強要されているのだが——はかり知れないほど深刻である。フランス農民は徐々にマニュファクチュアの領域に引きこまれたのだが、ロシアの農民は一夜にして大工業の竜巻きのうちにまきこまれた。マニュファクチュアが農民を燧石銃で倒したとすれば、大工業はその仕事を連発銃でやってのけたのである。」（この記述はそのままの形で「ドイツにおける社会主義」一八九二年に収録された。マルクス＝エンゲルス『全集』第二二巻、三六九頁から引用した。）

プレハーノフは、エンゲルスのこうした把握から学んでいることは明らかである。なおプレハーノフの独自性は、後述するように、ツァーリズム国家による農民収奪を古代エジプトの「東洋的専制」下のそれに比定するところに現われる。

(18) プレハーノフは次のように述べている。

「最近三〇年間〔一八六一年の農奴解放以後——引用者〕ロシア政府は、あまり『やる気』のない企業家でさえきわめて急速に富裕になれるほど、熱心に商工業資本に援助を行ってきた。ところが農業の方は商工業ほど高収益をもたらすことがない。したがって農業の改良のために誰も資本を投下しようとはしなかったというのも何ら不思議なことではないのである。しかも、誰もそうしなかったというだけでなく、むしろそれとは反対の志向があらわれた。すなわち、農業からあらゆる手を講じて資本を農業経営から吸い出して、それをいわば液体状態に変えて、それでもって商工業で一発あてようという志向

がそれである。」（Там же, стр. 367.）

(19) プレハーノフの場合、改革後「貴族は土地所有者階級としては重要性を失った。かつての巨大な地主地は一方では商人やあらゆる投機家の手に、他方では農民の手に移った」（Там же, 366.）というように、地主の資本家的経営への推転の方向はほとんどないとみている。ここで「私的所有の土地」という場合、プレハーノフが想い浮べているのは、主として商工業者、投機的商人の所有地であり、一部は富裕な農村ブルジョアジーである。プレハーノフは他の所で、これらの階層を指して「白い手」をしたブルジョアジーと呼んでいる。（Там же, 381）

(20) Там же, стр. 345.

(21) Там же, стр. 346.

(22) 「わが国における農民の国家への隷属は、史上例のないわが農村の貧困によるばかりでなく、あの悪名高い基盤にもよるのである。」（Там же, стр. 346.）

(23) Там же, стр. 349.

(24) Там же, стр. 376.

3. 飢饉克服の方向

ロシア国民経済のこうした危機的状況から脱出し、少なくともロシア農業を再建し、合理的農業発展の道を切り拓く基本方向が、プレハーノフにあっては、なによりもツァーリズム＝専制国家の打倒にもとめられたであろうことは、すでに述べてきたことから容易に推察しうるところであろう。だが、それが具体的に、またいかなる勢力によって果されるかについては、プレハーノフはどのように考えていたのであろうか。飢饉克服の基本方向が次の問題である。

プレハーノフがここで示した展望の特徴は、従来、ツァーリ国家の援助によって肥え太ってきたブルジョアジーがツァーリズムに反旗を翻すであろうということ、この点を強調したところにある。以下プレハーノフの言う所を聞いてみよう。

農奴解放以後、ロシアのブルジョアジーは各種の免税特権や補助金を国家から賦与され、またそれによって国家は逆にブルジョアジーから支持されてきた。改革後の国家とブルジョアジーの「政治的牧歌」は、この「単純な商業的打算」[1]の上に成り立ってきたのであり、農民からの租税収奪こそ、この政府とブルジョアジーの「同盟費用」を提供するものであったのである。だが、いま農民大衆を襲った大飢饉はこの「同盟費用」の調達を不可能にさせている。[2]そればかりでなく、飢饉は工業にも直接に重大な打撃を与えている。プレハーノフによれば、従来ロシアのブルジョアジーは「主として国内市場によって支えられてきた」[3]が、飢饉による「農民の購買力の完全な壊滅」は「必然的に国内市場の不足をひきおこした」。[4]それはロシア・ブルジョアジーの蒙った「高価な代償」を意味している。

「ブルジョアジーは、政府と同盟し、また政府の指導のもとで熱心にそれに努めてきたところの、人民の財産に対する恥知らずの強奪に対して、高価な代償を受けとらねばならなかった。」[5]

ブルジョアジーはこの苦境から脱けでるために再び政府に援助を要請しているが、政府はいまではそれを与えることができない。いやそれどころか、——とプレハーノフはつづいて言う、——政府自らが、人民からはもはや何もとることができないので、「やむなくブルジョアジーの財布に手を突っ込まざるをえない」。[6]たとえば所得税の導入によって、こうしてプレハーノフは、飢饉のもたらす第一の政治的帰結を、ブルジョアジーとツァーリ専制との「同盟」の破綻、両者の対立という点にみいだすのである。そこから、ブルジョアジーが「ツァーリを見捨てる最初の者とな

るであろう」[7]という見通しに立つのである。なぜならばツァーリズムが「最後のあがき」から「ブルジョアジーの財布に手を突っ込む」ことになれば、――かつては専制の「不正」によって利益をえていたので、その「不正」には意に介すことはなかったけれども――ブルジョアジーはただちに「合法的秩序の支配に眼を開き」、「人間と市民の権利、人民の福祉と自由、そして自治とについて語りだすであろう」[8]から。それだけではない。ブルジョアジーは「避けがたい破滅から自らを守り、自分の製品の販路を確保するために」、ロシアを飢饉の国に追い込んだかの土地関係、割替共同体を軸とする「農民の国家への隷属」の体制に対しても、その廃止を「必ずや必要とするにちがいない」からである。[9]

プレハーノフは、ブルジョアジーの「経済的利害」からして、専制とその土地制度に対立せざるをえないとする理由について、また別の角度から次のように説明する。飢饉という事態そのものが農民共同体の解体を著しく促進する、とプレハーノフはみる。その過程で農民の土地は「新しいブルジョアジー」（プレハーノフは、このブルジョアジーを「白い手」をしたブルジョアジーともよんでいる）の手に移るであろう。「現在の人民の貧困が、すでにみたように、そのことに少なからざる責任をもつブルジョアジーの利益になるであろう」ことは苦々しい事実ではあるけれども、その事が「農民の国家に対する農奴制的隷属を最終的に廃止する」ことにつうずることもまた、疑いのない事実である。[10]というのは、プレハーノフによれば、今日のロシアの土地制度は、農民の剰余労働を租税の形で一切ツァーリズムが収奪する制度であって、（のみならず、しばしば農民の必要労働部分にまで喰い込んでいるのが実情である）、そうした租税の課せられた農民分与地がブルジョアジーの手に移ることになれば、――そしてもしそこでブルジョア的借地経営が行われるとすれば、「利潤」部分が少くとも確保されねばならず、あるいはまた、彼が「資本家兼土地

所有者」Буржуа-землевладелец である場合には、更に「地代」に相当する収入が確保されねばならないであろうが、いずれにせよ——そのブルジョアジーは、少くとも「利潤」部分を残すような土地制度＝租税制度を必要とするからである、と。だが、——とプレハーノフは留保をつけて語る——ブルジョアジーは最後まで徹底して専制と闘うことはできない。「ただ疑いのないことは、ブルジョアジーは改革について語らざるをえないということであって、彼らがそれについてひとたび語れば、必然的に現在の政治秩序に対して否定的な態度をとらざるをえないだろう、ということだ」[11]。プレハーノフは、飢饉の政治的帰結が、第一にブルジョアジーとツァーリ専制との「対立」をもたらす、という時、それは右のような意味においてであった。

しかしながら、ブルジョアジーはまた自分自身を破産に追い込む固有の敵をもっている。これが、ブルジョアジーをして専制に対する闘争を最後まで貫徹することを許さない理由である。ロシアはその急速な資本主義化によって、西欧とは比較にならないほど急速にプロレタリアートを形成させた。真に革命的な階級はプロレタリアートだけである——と、マルクス主義者としてのプレハーノフの原則的な立場を表明しつつ、さらにすすんで、——そして、ブルジョアジーが始めたロシアの「西欧化」を一歩前進させ、そして真に下からこれを推進することができるのは、ロシアの労働者階級だけである[12]。大飢饉の発生を契機として始まったブルジョアジーのツァーリズムからの離反、この有利な条件を利用して、ロシアの労働者階級は、ブルジョアジーと共にツァーリ専制の打倒＝民主主義革命へと突き進み、アジア的専制社会の「西欧化」の道を大きく開くべきである。プレハーノフの主張はこのようにまとめることができる。

だが今ひとつの階級、農民についてプレハーノフはどのようにみていたであろうか。彼の飢饉論のトーンからすれ

ば、農民も反専制の陣営に充分位置づけられるであろう。しかし、プレハーノフはロシア農民にこうした期待をかけることができない。

「プロレタリアートと『百姓』Mzykiek とは全く政治的には対照的な存在である。プロレタリアートの歴史的役割は、『百姓』の役割が保守的であればあるほど、それだけ革命的である。『百姓』の上に一千年にわたって揺ぐことなく東洋的専制が支えられてきたのである。」[13]

すでに一八八八年に執筆した『ロシア社会民主主義者の第二次綱領草案』の中でも、プレハーノフは農民の政治意識について次のようにのべていた。

「ロシアの革命運動とその勝利は、なによりも農民の利益になるであろうが、それは農民の間では支持も共感も理解も得ていない。絶対主義のもっとも主要な支柱はまさに農民の政治的無関心と知的後進性にある。」[14]

こうしたプレハーノフの農民の政治的能力に対する消極的な評価は、この飢饉論においては、割替共同体の再把握（ツァーリ専制＝「東洋的専制」の経済的基礎という把握）とともに一段と強められたといえるのではなかろうか。たしかに、プレハーノフは一方で、「農民の土地は新しいブルジョアジーの手に移るであろう」という見通しに立ちつつも「しかし、革命運動が盛りあがると農民の側に事態を別の方向にもっていこうとする要求、すなわち紙上のものではなく、現実にある耕地所有を保障せよという要求が起こることもありえないわけではない。そして、その場合には我々はそのような農民の意向を必ずや支持するであろう」[15]とも述べている。だが、この時点（一八九一―九二年）のプレハーノフは、上述したように、むしろそうした「農民的土地革命」の可能性は少くないと考えており、したがって、彼の将来展望の軸は、自由主義的ブルジョアジーの反専制的志向の拡大、その可能性の方向に大きく傾いてい

たのである。プロレタリアートの同盟者として、農民ではなく自由主義的ブルジョアジーに期待し、またツァーリズムとブルジョアジーとの距離を殊更に拡大してみようとするプレハーノフの政治的オリエンテーションは、他方で彼のロシア社会認識の枠組の一角に、今端初的な形で姿を現わしつつあるツァーリズム＝「東洋的専制」という認識に支えられているのである。

(1) Г. В. Плеханов, Соч. III, стр. 378.

(2) Там же, стр. 377. また農民からの租税収奪＝買戻金をツァーリズムとブルジョアジーの「同盟費用」とみる同じ論理は、G. V. Plechanow, Russland vor einem Regime-Wechsel. «Neue Zeit», Jg. XIII, Bd. I, 1894/95, S. 271. にもみられる。

(3) Там же, стр. 314, 378. プレハーノフがこのように表現するとき、八〇年代以降、とくに一八九一年に頂点に達する高率保護関税体制の下でのロシアの産業資本の市場関係が想い浮べられていたのであろう。そして、その背景を成すものとして、プレハーノフなりの世界資本主義の大不況への認識があったと思われる。「現代の生産力は販路拡大の可能性を越えて、国際市場はいまや究極的な充塞状態に近づきつつあり、周期的恐慌は一つの間断なき慢性的恐慌に転化する傾向がある」と述べた『われわれの意見の相違』(一八八五年)の叙述は、それをうかがわせる。(Г. В. Плеханов, Соч. II, стр. 231.) なお、ロシアの一八九一—九二年の大飢饉は、また、大不況の最後の落ち込み局面と一致している。

(4) プレハーノフの市場理論が過少消費説に傾いていることについては、すでにИ・М・ブローヴェル及び田中真晴氏の指摘がある。И. М. Бровер, Экономические взгляды Г. В. Плеханова. М., 1960. стр. 107-112. 田中真晴『ロシア経済思想史の研究』七九頁以下参照。

(5) Г. В. Плеханов, Соч. III, стр. 378.

(6) Там же, стр. 378.
(7) G. V, Plechanow, Russland vor einem Regime-Wechsel. «Neue Zeit» Jg. XII. Bd. I. 1894/95. S. 271.
(8) Г. В. Плеханов, Соч. III, стр. 378-379.
(9) Там же, 379.
(10) Там же, 380.
(11) Там же, 379.
(12) Г. В. Плеханов, Новый защитник самодержавия, или горе г. Л. Тихомирова. (1889), Соч. III, стр. 78.
(13) Г. В. Плеханов, Соч. III, стр. 383.
(14) Г. В. Плеханов, Второй проект программы русских социал-демократов, Соч. III, стр. 401-402.
(15) Там же, стр. 419.

四　「外発的資本主義像」と「東洋的専制論」

さて、飢饉論をつうじて、プレハーノフはロシア資本主義の蓄積基盤として農村共同体＝割替共同体が果した特別な役割に注目し、またそれがモスクワ・ルーシ以来のロシア専制「固有の経済的基礎」であったとの見解を示すに至った。割替共同体の歴史と役割にかんするこのようなプレハーノフの把握は、先にみたところの『われわれの意見の相違』（一八八五年）における共同体論すなわち、「ロシア資本主義発展論」（本稿第二章――前号参照）とどのような関連にあるのだろうか。すでに詳しく述べたように、プレハーノフがマルクス主義者へと思想的転回を遂げた時、その旋回軸を成したのは、ナロードニキの農村共同体論（＝「共同体の理想化」）に対する批判であった。その際、彼

の立論の出発点は、ロシアに現存する農村共同体が――ナロードニキによって意味づけられたように――ロシアの歴史発展を西欧のそれとは異質なものにしてきたロシアに独自な存在、したがってまた祖国における別の道（資本主義の段階を経ないで社会主義（直接飛躍）の追求を保障するような存在ではなく、一般に「原始共産主義の解体期の一段階」に位置する、その意味で世界史的＝普遍的な歴史的存在であって、それは基本的には、現物経済から貨幣・商品経済への移行の過程で必然的に解体する運命にある、というそのような認識であった。そして、ロシアの共同体の顕著な形態的特質といわれる土地割替制についても、それがロシア農民の、とりわけ富農経営における耕作改良＝農業生産力上昇への志向を阻む重大な桎梏となっているという事実についてもプレハーノフは充分に認識していたのであるが、しかしそこでのプレハーノフの実践的＝理論的な課題がまずもってナロードニキの主張の根幹をなすところの、将来の社会主義的生産組織の基盤としての共同体把握、この点をくつがえすことにおかれていたかぎり、彼の議論の基調は、いわば割替にもかかわらず、ロシアの農村共同体が内在的＝必然的な解体要因をもっているということ、それ故に解体はどうしても避けられないのだ、ということにあったといってよい（土地の共同所有と経営の私的性格との矛盾、いわゆる共同体の固有の二元性把握。――この点に共同体の内的解体要因を見いだしたことはプレハーノフの功績の一つに数えてよい）。したがって、そこでは割替共同体が「農奴解放」以後も広範に存続したことについては、それはロシア社会の歴史的発展の――すでに共同体解体を果した西欧社会とくらべて――単に時間的＝歴史段階的な遅れを示すにすぎないものと把握されていた、といえよう（そのこと自体をとらえて、プレハーノフには構造的把握がなかったとする批判は妥当ではない。最初のナロードニキ批判の仕方としては、それはそれとして至当な批判であり、またそうした批判は一度は踏まなければならぬ手続きであったと評価すべきだと思う。だが、そこから

プレハーノフのロシア資本主義の構造的特質の把握が、どのような方向に深化していくか、問題はこの点に存する)。そのかぎりでは、ロシアの共同体を特徴づける土地割替制とその問題が、プレハーノフにおいては、ロシア資本主義の発展構造に深くかかわる問題としては、必ずしも充分に意識的に検討されたとはいいがたい。だが少くとも、プレハーノフは一度は共同体の内的解体の論理を摘出することをつうじて、割替がロシア農民の、とりわけ共同体の分解から形成されつつある「経営上手な」農民の生産力的志向を阻む大きな障害を成すとの認識を獲得していたのであって、かかる初発における認識が、ロシア農業の生産力構造、及びそれを基柢とするロシア資本主義の発展構造の著しい後進性と跛行性に彼の眼を見開かせる一般的な素地を成していたといってよい。だがまた、これも先に明らかにしたように、プレハーノフの共同体解体論には、今ひとつの視点――しかも彼の共同体解体論の中で大きな位置を占めていたところの――、すなわち解体の契機を「租税の重圧」に求める、いわゆる外的解体論の論理があったけれども、今大飢饉の発生を眼前にして、その根本原因の究明をつうじて、プレハーノフの思考の中ではこの後者の視点＝論理が大きくクローズアップされてくる。そして、飢饉にあえぐロシア農民の悲惨な状態が、西欧資本主義の原蓄過程での農民のそれとも比較にならないことに想いをめぐらすに至るとともに、プレハーノフは当初予想した以上に頑強に存続する共同体について、あらためて自己の認識を問い直していくのであった。しかしなお、飢饉論の段階では彼のロシア社会認識の基調はロシア資本主義発展の確認に据えられており、右の認識の深化は、さしあたり、政治的には八〇年代―九〇年代のツァーリ専制の反動体制の強化と――また「大不況」に巻き込まれたことによって必ずしも順調な過程を辿ったとはいえないけれども――経済的には急速な資本主義の発展という、プレハーノフの眼にはある意味でパラドキシカルなプロセスと映ったところの、ロシアの近代化過程のこの特異な事態を解明せんという志向とな

って現われる。ここに、その結節点的意味をもつものとして、ロシアの割替共同体の問題が、あらためてプレハーノフによって問い直されることになるのである。

飢饉論（ないしそれに前後する一、二年の彼の諸論稿）にみいだされるプレハーノフの割替共同体についての再検討＝再把握は、直接には「近代の共同体」の起源についての新見解の提示という形で果された。いわゆる「国家財政起源説」、「断絶説」がそれであった。割替の起源についての新見解は同時に、ツァーリズムを「東洋的専制」に比定して把えることでもあった。更に、このことはまた、ロシアの歴史発展過程を「西欧化」という視点から把握する歴史認識を生み、この「西欧化」過程の起動因が――ロシア社会の内部に探られるというよりもむしろ――「西欧との隣接」という特殊ロシア的な外的条件（プレハーノフのいう「国際関係の影響」というファクターの比重増大）のうちに求められる、いわゆる外発的なロシア資本主義発展像が、プレハーノフにおいて確定するプロセスでもあった。

まず第一に割替共同体にかんするプレハーノフの新見解についてみていこう。ほぼ飢饉論を前後する時点でプレハーノフは、土地の定期割替を伴なうロシアの農村共同体が単に「原始共産主義」から「連続的な」系譜に立つものではなく、十七―十八世紀に国家の財政的利害から、いわば「上から」人為的に設定されたものだとする見解を示し、かつての「相違」段階の見解を訂正した。

「現在のロシアに存在しているような耕地の定期割替は、我が国の古代の農村共同体には知られていなかった。後者は……他のどこでも存在していたように、ロシア・スラブ人のところにも存在していた氏族制度（родовой быт, Gentilferfassung）の解体の上に発生したものであった。そこでは耕地は農戸のときとして多人数の家族の、奪われざる不分割の所有となっていた。なんらかの理由で行われた耕地交換（переверстки, Ummessung）はある家

族に属する土地所有の大きさには変更を加えることなく、ただその位置を変えたにすぎなかった。だが、国家権力の発展、ツァーリの純東洋的専制主義の発展とともに事態は一変した。土地に緊縛された農民は、土地に対する太古からの自分の権利を失った。土地は農民のものとはみなされず、国家のものとみなされるようになった。あるいは正確にいえば、ツァーリの所有とみなされるようになった。人頭税の導入が古い秩序に対して最後の打撃を与えた。もし『チャグロ』の土地がもはや農民に属するのではなく、ツァーリに属するとすれば、そしてまた登録(ревизия, Revision)に付されたとすれば、エフィメンコ女史(А. Ефименко)が正しく指摘したように、そこからは不可避的に『国家は各農奴に土地を分与することによって支払能力を確保しなければならぬという当然の帰結』がもたらされる。その際、これは国家にとって『義務』であるというのではなく、経済的な利益となったことは、つけ加えるまでもない。[1]」〔傍点――プレハーノフ〕

政府によって農民に対する『生活の保障』といわれ、またナロードニキからは『土地保障』のシステムとよばれて、ロシア農民の平等性＝共同性志向を育むものとして「理想化」されてきた割替共同体は、プレハーノフからすれば、その起源に照してみた時、専制国家ツァーリズムの財政＝租税徴収を保障する農民の土地緊縛の体制にほかならない。それは「農民の国家への隷属の体制」すなわち「東洋的専制」の基柱である。こうして、ナロードニキがロシア農民の内在的＝本来的な平等性＝共同性を表現するとみなした土地の割替制は、実は――それ以前に存在していた「古代の農村共同体」とは異って――国家＝ツァーリ権力によって、あるいは「暴力的に」、あるいはまた「非暴力的な方法」によって、しかしいずれにせよ農民に対しては外的＝強制的に導入された制度にほかならない、とプレハーノフはいうのである。[2] プレハーノフは割替が発生するプロセスについて、次のように説明した。[3]

政府は「人頭税の導入」（一七二四年）とともに農民の租税負担能力を確保するために、各農戸への土地分与を「一律均等化」（генеральное поравнение, Generalgleichmachung）の原則に従って行った。それは『自分たちの古くからの所有地を奪わないように』という農民の要求と衝突した。多数が糾合し、ときに丸太棒をもって権力に対抗する農民の抵抗を暴力的に弾圧することをつうじて、その制度は導入されたのだ。またこの「新しい共同体」の形成にあたって、直接に暴力的方法がとられなかった場合には、農民に賦課する租税が「土地からの収入を超過する」ように高額であったこと、及び農民の租税支払を共同体の連帯責任としたこと、この二つの条件が採用された。こうした二つの条件がある場合には、例えば土地の少ない農戸がしばしば陥る租税の滞納を、土地を多くもつ農戸が代わって引き受けねばならない。そこで滞納者に代わって納税をした農戸は、そのかわりに割替によって滞納者の土地の利用権を獲得するのである。こうして共同体内部に発生した土地の定期割替制は、国家によって設定された、連帯責任制の下で課せられた過重な租税負担を農民の間で平等なものとするメカニズムとして発生した、とプレハーノフは理解するのである。また、土地割替の慣行は、まず国有地農民の間に始まったけれども、この土地分与（＝土地緊縛）の「一律平等化」の原則は、「農民を土地に関して満足させる」ことによって、個別地主に対しても労働力をよりよく保証する役割も果したので、割替制は地主地農民の間にも広がっていった、と。

さて、右にみたようなプレハーノフの割替共同体についての新しい見解は、それ自体としてみるならば、現時の共同体の主要な機能＝役割が国家による農民からの租税収奪の保障という点にあることを、明確にしたものであって、そのかぎりでは基本的には従来のナロードニキ的共同体論批判の延長線上にあり、またそれを補強する意味をもったといえよう。だが、このナロードニキ批判の深化は、プレハーノフの場合、割替共同体を、モスクワ・ルーシ以来一

貫してツァーリ専制を支えた固有の経済的基礎とみる見地にゆきつくのであって、それ故に、地主＝農民関係とは区別される国家＝農民関係こそがロシアの伝統的社会の基軸関係だとする見解が生まれるのである。そこに古代エジプト農民に匹敵するロシア農民の隷属的地位とまたその停滞性の根拠がもとめられることにもなる。プレハーノフの共同体把握がそのような方向に向ったことは、ひるがえって、初発のナロードニキ批判においては少くともプレハーノフによって把み出されていたロシアの共同体の内在的矛盾、すなわち、共同体的土地所有の上で営まれる農民経営の私的所有（所有と経営の矛盾）という「固有の二元性」把握の視点が大きく後退せしめられることを意味する。そしてそれはまた、かかる視点（＝共同体の内的解体論）と緊密に結びつき、あるいはそこに孕まれていたロシア農村内部における経営＝生産力的契機を見透す視点が、プレハーノフの認識枠内で希薄化していくということでもあった。したがって、そこにロシア社会の歴史発展（それはさしあたり資本主義の発展である他ないのだが）の起動力を、ロシア人民生活の奥底にではなく、むしろ逆に、共同体の外部に、ロシア社会の外にもとめる、いわゆる外発的発展論が、大きく拡大することにもなるのである。ここから、プレハーノフの独特なロシア史把握が現われる。

かつての「人民の意志」派の理論家であり、主たる論敵でもあったチホミーロフが君主主義＝汎スラブ主義に転向したとき、それはかのナロードニキ的「共同体の理想化」論の論理必然的な帰結であると論じた論文の中で、プレハーノフは次のようにのべている。

「ロシアの専制には、疑いもない歴史的功績がある。そのもっとも主要なものは、専制がロシアの内部に自分自身の崩壊の種を蒔いたということにある。たしかに、ロシアの専制は、ヨーロッパと隣接していたことによって、やむをえずそうしなければならなかったのであるが、それでもやはりそうしたことを行ったことは事実なのであっ

て、われわれはそこにロシア専制の功績を心から承認するであろう。古代モスクワ・ルーシは完全にアジア的性格によって特徴づけられていた。そのことは国の経済生活にも、あらゆる道徳にも、全国家体制にも顕著な形であらわれていた。モスクワは一種の中国であったが、この中国はアジアではなくヨーロッパの中にあった。そこから次のような本質的な相違が生じた。本物の中国は全力を挙げてヨーロッパから遮断されたが、わがモスクワの中国は、イワン雷帝以来手にするあらゆる道具を用いて、小さなものとはいえヨーロッパに向って窓を開けようと努めた。ピョートルがこの偉業を行うのに成功した。彼はロシアを硬直化から救う大きな転換をもたらした。(4)」〔傍点——引用者〕

みられる通り、「完全なアジア的性格」によって特徴づけられる「一種の中国」、モスクワ・ルーシが、少くとも——「本物の中国」とはちがって——離陸(テイクオフ)することができた（すなわちプレハーノフのいう「西欧化」への道を歩み出した）主たる理由は、ロシアが「ヨーロッパと隣接していた」こと、したがって生産力的に先行する西欧諸国からのインパクトを早い時期から、そして他のどこよりも強い力として受けてきたからに他ならない。ピョートル改革にはじまった「西欧化」の波は、農奴解放によって、更に大きなうねりとなり、ロシア社会全体をとらえるであろう。こうしてプレハーノフは農奴解放以後のロシアの資本主義化を、ピョートル一世以来の「西欧化」の延長線上に位置づけ、その歴史的起動因の主要な一つとして「西欧との隣接」という、その意味でロシアに特殊な条件を指摘するのである。

しかし、ロシア社会の発展を、漸進的な「西欧化」一本で単線的に把握するにとどまるとすれば、そこには特別に目新しいものはないし、またロシア自由主義の見解と本質的に区別されるところはない、といってよい。ロシアの「西

欧化」＝資本主義化にとって決定的な契機とされた「西欧との隣接」という条件は、しかしまたプレハーノフの理解によれば、ロシア社会に一つの大きな問題＝矛盾をひきおこすものでもあった。プレハーノフは言う。

「問題は次のことにある。その経済的後進性という点で、他のアジア農民にほぼ匹敵するロシア農民は、西ヨーロッパと隣接していたことによって、きわめて複雑でかつ非常に高くつく国家機構を背負わねばならなかったということ、これである。その国家機構を支えるためのロシア農民の支払は、アジア農民よりもはるかに大きかったのである。[5]」

ここでプレハーノフが言わんとするのは次のようなことであろう。ロシアにおける「西欧化」の起点、ピョートルの改革は、他面において農村では「人頭税」の導入によって割替共同体の一般化をもたらし、「農民の農奴制的隷属の強化」[6]に導いた。またロシア農民を「地主権力から解放した」農奴解放は、一方で大きくロシアの資本主義発展への「門」をあけたのであるが、しかし同時に、他方で「土地付解放」＝強制的買戻操作の実施と土地緊縛体制＝割替共同体の維持とによって、旧地主地農民を含めてロシアの農民大衆を「国庫の農奴」[7]に転化した。したがって、プレハーノフによれば、ロシア農民は「西欧化」の「費用」をも負わされたことによって――一方では全く「西欧化」の機会をもたなかったとされるところの――ある意味では古代エジプト農民以上に、苛酷な状態に陥しめられた、というわけである。ここではすなわち、プレハーノフは、ロシアの「西欧化」過程が同時に農民の「アジア的収奪」を強めるという側面を鋭く指摘しているのである。社会の「上層の西欧化」が同時に「基底のアジア化」を伴うというロシア社会発展の特質の指摘（この「西欧化」と「アジア化」の矛盾の爆発が一九〇五年革命であったことは、後にプレハーノフが指摘するところである。[8]）、これが一八九一―九二年の大飢饉の考察と分析をつうじてプレハーノフなり

に接近したロシア資本主義の構造的特質把握の一つの柱であった。そして、そのような接近を用意したものが、くりかえしていえば、この時点でプレハーノフが到達した、ツァーリズムの「固有な経済的基礎」としての農村共同体の再把握、割替共同体にかんする新しい見解であったのである。

だが、こうした方向に深められていったプレハーノフのロシア資本主義の構造的特質把握が、他ならぬ「東洋的専制論」の視角から果されようとしていた点に――プレハーノフの実践的な革命論のレベルにおいて――ひとつの重大な問題点を残すことになる。

たしかに、ロシア農民の収奪と貧困は――プレハーノフの指摘するようにロシア社会に対する西欧資本主義の圧力の強さによって――甚しいものがあった。だが、それにもかかわらず、ロシア農民は分与地経営を維持し、僅かなりといえども経営拡大への志向性を完全に失っていたわけではなかった。また、たしかに農民の間での土地割替慣行は、ツァーリ政府と地主による農民収奪を保証する有効な装置として機能した。しかし、それはまた、農民の側からすれば、少くとも自己の生活と再生産の基本的な場でもあったのであり、そこには――地主制とツァーリ専制によって著しく抑えつけられてきたのではあるけれども――多少なりといえども生産力的な発展の契機が孕まれてもいたのである。そして、大飢饉の終息後開始されたヴィッテの工業化政策はロシア資本主義に未曽有の高度成長をもたらしたのだが（一八九〇年代）、それが一定の限界に達するとともに（一九〇〇年恐慌）、九〇年代の工業化を支えたところの狭隘な農業基盤＝雇役制的農業基盤と激しくぶつかる局面があらわれたとき、農村内部の生産力的モメントは、農民の土地要求＝「土地総割替」要求という形態をとって（その社会経済的内容は、「勤労原理」「均等用益」というス

ローガンの下で、実際に額に汗して働く者に平等に土地を与えよ、という小農範疇の大衆的な確立の要求であった)、一挙に下から噴出するであろう。そしてこの時、プレハーノフは、農民の「土地総割替」要求が、かえって――ツァーリ専制＝「東洋的専制」の経済的基礎とプレハーノフに把えられたところの――割替共同体の強化につながるものとして、これを本質的に歴史逆行的な「アジア的運動」[9]と断ずるであろう。いま、その飢饉論において、プレハーノフは端初的な形ではあれ、割替共同体の再把握をつうじて、「東洋的専制論」の視点をうちだすに至った。それは、一面からいえば、「ロシア資本主義発展論」の延長線上にあり、プレハーノフなりのナロードニキ批判の深化を示すものではあるが、しかし、他面ではロシア農民経営の停滞性を強く押し出すことによって、ロシア農民経営に多少とも孕まれているやもしれぬ生産力的契機を透視するプレハーノフの眼を曇らせることにもなった。農村共同体内部に存する歴史発展の起動力、これを把み出すことによって将来のロシアの歴史発展と変革の方向を探るという視点に、プレハーノフはついに立ちきれずに、むしろロシア資本主義の発展の外発性、外在性の表象にますますひきずられていったところに、プレハーノフが農民否定の「東洋的専制論」に行きつく根拠があったのである。また逆に「東洋的専制論」の構築は、ロシア資本主義発展の外発性を一層強調することにつながり、外発的ロシア資本主義発展像をプレハーノフの認識枠組の中に確固不動のものにすることでもあったのである。

(1) Г. В. Плеханов, Всероссийское разорение, Соч. III, стр. 347, 同じ記述は、G. V. Plechanow, Die sozialpolitische Zustände Russlands im Jahre 1890. «Neue Zeit», Jg. IX, Bd. 2, 1890/91, SS, 791-792. にもある。

(2) この点を詳しく論じたものが『ヴォロンツォフ（ヴェ・ヴェ）氏の労作におけるナロードニキ主義の基礎』（一八九六年）第二部「ナロードニキ主義の理論家としてのヴォロンツォフ氏」、第二章「農村共同体（オブシチナ）」である。Г. В. 『Плеханов,

Обоснование народничества в трудах г. Воронцова (В. В.), Соч. IX, стр. 120–197.

(3) 以下は Г. В. Плеханов,Соч. III, стр. 347-348. に拠った。

(4) Г. В. Плеханов, Новый защитник самодержавия, или горе г. Л. Тихомирова, Соч. III, стр. 74.

(5) Г. В. Плеханов, О задачах социалистов в борьбе с голодом в России. Соч. III, стр. 359.

(6) Г. В. Плеханов. Соч. III, стр. 75.

(7) Там же, стр. 360.

(8) Г. В. Плеханов. История русской общественной мысли, часть I, введение : Очерк развития русских общественных отношений, Соч. XX, стр. 114. 石川郁男訳『ロシア社会思想史序説』二〇六頁。

(9) Там же, стр. 126. 石川訳、二二七頁。